夕刊 磐城新聞
二月二十一日發行
定價 一ヶ月金六拾五錢（郵税金五錢）
廣告料 普通欄 一行金六拾錢 特別欄 一行金九拾錢（場所指定一行一圓增）
編輯兼印刷發行人 柏木 磐城國石城郡平町十六番地
發行所 磐城新聞合名會社
電話五六四番
（日曜祭日翌日休刊）

春の隨筆 三

六條篤

私の住んでゐるのは大和の國多武峯、藤原鎌足公を祀つた談山神社の所在地である。秋の紅葉の方が名高いが『來て見ればこゝも櫻の峰つゞき吉野初瀨の花の中宿』と云ふ歌もある通り櫻も古木が相當ある。土地が高くつて寒いから開花が遲い。それが去年各地の開花の狀況のラヂオで放送された折多武峯五分咲きと放送されたのに蕾はまだ堅いやがて七分咲き八分咲きとなり滿開を報せられた頃にやつと綻び初めた樣な次第で誰かの注意に依つてかそれは再び七分咲き位から繰り返されたが。來た花見客の不平も勿論であつたが、自分はかう他所から急ぎ立てられては急がずにはいられないであらう花の方が氣の毒でならない、ゐはたゞしい世相につれて、丁度花街に咲く花のやうに少女の姿が想はれて、痛ましくて自分は勿論文筆に依つて食してゐるものではないが世の文筆雜業家にも又思合されるのである

五月　五月は春といふよりもそれは獨立した別の季節とした方がいゝ

此所迄書いておいた原稿はそのまゝで約半月經つて暦の上で明日は立春、今宵は節分である。そして私の住む田舍では節分と舊正月が今年は重つてゐる。『年の內に春立ちにけり一年を去年とはいはん今年とやいはん』といふ樣な古歌の感懷は今年は先づない譯であるが『春立つ』そう心の中で何か知ら日に心彈むかそういへば南の春の苑にひとりしづかに春の陽光を浴びてゐる童話の中のゴムまりに私はなり切つてゐる。フト見る障子の破れ、それさへ外面の立ち初める春の氣配のうかゞはれて心嬉しい

二三日前巴里にゐる人からの賀狀がとゞいた。それが地中海を經て印度洋を渡つて來たものであれば已に私の手にとゞいた時には柔らかな芽を吹いてゐたであらうに、惜しい事にそれはVIA SIBERIAであつた。私からは賀狀は出さなかつたから早速私の田舍は丁度舊正月である事を傳へる返事を書いてそれも亦VIA SIBERIAで出したが、西比利亞の寒さを思へば船で出せばよかつたと思ふ、それにしてもはるかに佛蘭西の春に思ひは馳せるのだが

忘年句會

焚火子に放課のベルのひゞきけり　寒山子
新墾のところ〳〵の焚火跡
枯芝や池蒼黑く澄みわたる

炭礦所見
鐵管の燒けて來りし焚火かな
廢坑の鈑の明るし
三十三才
焚火守る子へ呼びかけつ土を掘る
まろき背を見せて焚火をはなれ行く

磐城歌壇

新妻久滿夫選

（二）

藤野冷子

○そつと置きし棕櫚をくわへて啄みつ捨てゝは運ぶ巣の近くまで
○うつし植ゑし丁字は黃ばみ一枝に觸るれば黃葉はハラ〳〵落ちぬ
○鐵瓶のさ湯はたぎれりいろり邊の炭火は赤く炎立ちたり
○ふと覺むれば人のね息も音もせず忙しく聞ゆ置時計の刻み
○よく聞けばかしましき中にチクタクと稍落ち着ける柱時計の音

寸評　前紙で申した通り歌そのものが眞實性を帶びて來たので氣持よくよまれる。これからその實相をありのまゝに表現してゆく樣にして欲しいものである。それから徐々に詞づかひの點に注意しながら歌材も相當吟味せられる樣にしていつたならば正しく歌も伸びてゆくことだらう。

磐女校友會誌 かをりから

虫を聽く

二年　阿部ミチ

湯ぶねに思切つて『ドブン』と入つてみたが虫の音はやまない。今度は湯の中で『バチャバチャ』やつたがまだやまない。しかたがないからだまつて虫の鳴くのを聽く

淋しさうなその調。まるで銀の鈴のやうな澄んだ音だけど、何處となく哀れつぽい音。『何處だらう？鳴いてゐるのは』と思ひながらあたりを見廻した

隅にあるたらひの蔭らしい。どうして湯殿の中になんて入つて來たのかしら、と考へながら水道の栓をひねつた。『ジャア〳〵』と音をたてゝ水が出たら、ぱつたり調がやんでしまつた。水の音にたまげたらしい

『とうとうやんぢやつた』とつぶやきながら湯ぶねにひたつて、ガラス窓から來る月光を見詰めてゐたら、やつぱり庭の方からもかすかに虫の音が聞えた。コロ〳〵寂しさうな澄んだ音が……

秋の團欒

二年　福尾通子

風もない朗らかな秋空。新嘗祭で朝から國旗が家毎に掲げられた。數日前から今日一日を如何に暮さうと相談してゐた。一同起床して朝食を終へると、父は皆に外出の仕度を命じて自動車を呼んだ。私達は喜んで手に手に自分の身のまわりの物を携へて乘つた。弟などは海軍服に身を固めて嚴然と運轉臺に跳び乘つた。一同は何處へ行くのかわからなかつた。自動車は廣い出聞をスピードを出して走つた。街路の人も木も矢の樣に飛ん。目にも停らぬ。唯西の山脈一帶が朝日に照されて眞紅に輝いてゐる。自動車は泉驛から右に折れて山路に入つた。始めて弟達は萱手鑛泉に行くのだと判つたらしい。嬉しさうに去年行つた時の事を思出しては兄さんに話かけてゐる。萱手に著いたのは午前九時頃だつた。今年は去年と違つて、正面家屋の玄關などは堂々たる建築の三階建で私達は三階の二間に通されてほつとした

頰白の巣

（フランス）アルノード・ベリカン
島田忠夫譯

僕は、どう〳〵、頰白の巣をつかまへた
小さへ雛が
二つ、三つ、四つゐる
ずゐぶん長い間、お前さんたちを、ねらつてゐたんだよ
可愛さうな小鳥さんたち
叫んでごらん
鳴いてごらん
暴れてごらん
――小さなお暴れさんたちよ！
おゝ、しかし、そんなことは皆、無駄なんだよ
お前たちは、まだ翼がないんだもの
どうして僕の手から、逃げられるだらう？
おや！
あの悲しげに鳴いてるのは
この雛たちのお母さんのこゑぢや、ないか知ら？
あゝ、さうだ〳〵
雛たちの上を廻つてゐるのは
あれは、お父さんだよ
あゝ、僕は、夏はいつでも
谷間の杉のかげで、かれらのやさしいこゑを聞いては眠つたものを
どうして〳〵、かれらを悲しませたりしてなるものか！

その日〳〵

2月22日

△聖德太子薨去せらる（推古帝二九）△廟行鎭の大激戰肉彈三勇士壯烈なる爆死を遂ぐ（昭和七）△帝國政府は南京政府に對し熱河の支那軍隊撤去要求の重大警告を發す（同八）

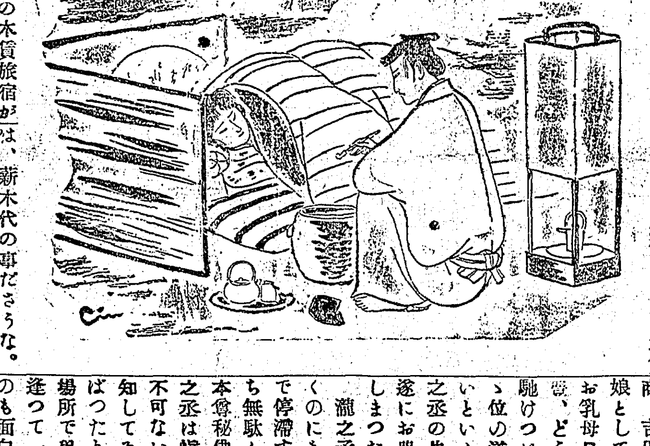
○早春の光の中で、名知らぬ鳥がしきりに鳴いてゐる。島木赤彥の、頰白の歌が思ひ出される。

講談 戶隱奇譚 山の怪秘 (115)

丸山寬雄作　眞木浪畫

盜人蛇（三）

この旅の曲藝小屋の近くには松井田宿の木賃旅宿が二三軒、置き忘れられたやうに點在してゐる、表戶は半障子、くすんだ下見板の二階建、屋根は杉皮葺で置き石が整然と乘せてある。また得意の定客としては、先づ旅藝人、行商人、法界男でろれん節、雲水といつた下級に屬する方の客種である。從つて間取りでも入り口でも親しみ易く出來てゐる。旅僧が來て泊れば宿の佛壇に向つて心からなる般若心經を捧げて出立するとか、經師屋職人が泊れば茶代がはりに澤山もない部屋といふ部屋の切り張りをして風穴を塞げてゆくとか、屋根屋が泊れば雨漏りを見てゆくとか、大工が來れば勝手流しの腐れを直してゆくとか、旅藝人ならば手踊りの一つも踊つてくるとかどこか相互的で親しみ易い安旅籠である。大体この種の木賃宿といふ名からしてその語源を正して見ると親しみ易い解釋となる。木賃は、薪木代の事ださうな。昔は米味噌から薪炭の類まで携帶して旅行した事があつた。從つて旅人が炊事一切をする宿を木賃宿と呼ぶことになつたのだ



その木賃宿『さがみや』の中の話となる

半障子に油を引いたのは横なぐりの雨を防ぐため、そこへ斜に『さがみや』とぎごちない筆で書流してある

二階の一間ではまだ寢ないと見えて、ほのかな明りがうつすらと障子に映つて見える。紫紺の闇が、この宿のあたりに立ちこめて近く鎭守の境內から、小屋がけの鳴物の音が、未だに響いてゐた。宵も深まつた四ッ近き頃――

『いやに耳ざはりだな。あの銅羅の音は先頃から耳について寢られやしねえ、仕樣のねえ乞食芝居だ』

ぶつくさ云ひながら、また煎餅蒲團へもぐり込んだ男がある瀧之丞だつた

『昨夜も、おそくまで聞えてゐましたよ』

瀧之丞と並んで別の床の中にはお豊が蒼白い顏をうづめてゐた

二人は追分けの宿場から手に手をとつて、こゝまでのがれて來たが、あまり道を急いだものかお豊が疲れ病むをこぢらせて、この宿で逗留を餘儀なくされてしまつたのだ。お豊にとつてこの峠の馴れぬ凹凸道はたしかに身体に應へたに違ひない。かつては水內町の豪商、吉田屋伊左衞門の一人娘として生れ、蝶よ花よとお乳母日傘で育てられたお豊、どうして追分から殆ど馳けつゞけたと云つてもいゝ位の道中に、へこたれないといふ筈があらうか。瀧之丞の先きを急ぐ性急さは遂にお豊の身体を害させてしまつたのだつた

瀧之丞にとつて追手をまくのにも一時、こんな場所で停滯することは、あながち無駄とは云へなかつた。本尊秘佛を所持してゐる瀧之丞は愼重に事を運ばねば不可ない位のことは百も承知してゐた。從つて行當りばつたり的にこんな意外な場所で思ひ設けぬ障害に出逢つて一時旅を中絶させるのも面白いと考へられた

二人はもう、このさがみやへ泊り込んで幾晩にもなる。この間から目と鼻の先きにある小屋ものの鳴物にはほと〳〵閉口してゐた

今、瀧之丞はまた耳を塞いで掛蒲團を深くかぶつて寢たが、矢張り騷々しい銅羅の音が耳につくらしい

床の上へ起上つては、また横になる。そこ行くと女のお豊は無暗に物事に焦立たぬせいか、瀧之丞に輕く答へたまゝすや〳〵と眠り込んでしまつた

そのうち、いゝ事に輕業小屋も閉場になつて、何の物音も聞えなくなつた。瀧之丞はそこで漸く夢路をたどることが出來たやうだつた

專門 耳鼻咽喉科
高柳耳鼻咽喉科醫院
平町驛前（電三三六）
醫學博士 高柳博明
（入院應需 自炊ノ便アリ）

內外建築材 建具材
入 阿部材木店
磐城國平町（公園下）
阿部好利 改メ（寧）
電話四九四番

小兒科
志賀醫院
平町南町五〇番地
電話一六二番
（入院應需）

十日 体溫計の檢査日です
檢機新設 お宅の體溫計は？
◎正確な体溫計を御使用下さい
◎毎月十日の檢査日御利用下さい
度量衡計量器 指定販賣人
西村屋藥局
平二・電三番

專門 耳鼻咽喉科
平町田町（電六九一）
病室完備 自炊ノ便アリ
山內醫院
醫學士 山內亨吉

內科
川井內科診療所
平南町（電二四三）
川井安子

貸切り
專門優良車
乘心地の超特快適な三四年型デラックスセダン着
何卒御用命願ひます
平町四丁目
鈴木自動車部
電話二一七番

精神病科 腦脊髓病科 神經病科
郡山腦病院
郡山市外大槻村針生
郡山驛より約三十丁 安積中學より約五丁
電話九二五番
院長 醫學士 金森五郎
入院隨時

吉田眼科病院
平町紺屋町 電話六八番
醫學士 吉田久雄

一月星豆炭
一八キロ一袋
金八十錢
平 驛前
ツ 阿部石炭商店
電話三七番

國は日本。凍魚はヒノマル
ヒノ◎マル 凍魚
鯛。海老。白魚。帆立貝
刺身魚、煮魚、各種品々一個一尾ニテモ迅速配達……
日本水產一手特約 發賣元
平製氷株式會社 電話二八・三一六番
平町代理店
ト印魚問屋 電話五二八番

內臟外科一般 外科花柳病科
（入院隨意）
平町六丁目（橋際）
木村外科醫院
電話三〇九

良品廉賣に勝る商略なし
磐城セメント特約代理店
金物問屋 和洋銅物
久 釜屋商店
磐城國平町五丁目 電話九九番 振替貯金口座東京一〇九五六番
確實敏捷は久の生命なり

大平町を切盛りする十年度歳入出豫算案
昨廿日内示來廿五日總會

昨廿日午後内示された平町十年度豫算は（歳入）三十四萬三千八百五十六圓（歳出）經常部二十九萬六千百六圓（臨時部）四萬七千七百五十圓で九年度當初豫算に比し經常部一萬九百五十八圓增、臨時部二百二十六圓減、差引一萬七百三十二圓增である、來る二十五日午後一時から豫算總會を開く事に決定

無い袖は振れず大体凡調の編成
新味は市制調査の二千圓

無い袖は振られぬ所謂非常時豫算丈けに今年も亦大体に於て新味の稀薄さが窺はれ、當の青沼町長も脾肉の歎を漏らして居る、然し町民の關心を惹るものは何と云つても市制調査費（二千圓）の活用にあらう、其他目立つ事業は小學校費七八、〇七六圓（一、六六四圓增、學級增加看護婦設置に伴ふ諸給與需用費の增加）職業紹介所費三、二二一圓（六〇一圓增、事務職員による所員の增加に伴ふ諸給與其他）警備費八三〇八圓（一、九七三圓增、雜給、需要費に於て減するも常備消防隊費の增額）等が主なるもので新豫算では經常部に於て社會事業費三百五十圓、害虫驅除豫防費百五圓、臨時部に於て市制調査費の外國勢調査費四百圓、青年訓練所費六百圓（兵器室新設）などがある

增税約四千圓
戸數割平均額釣上其他
新豫算と町民の負擔增加

一般の懐ろに最も響く町税額は總計十四萬八千六十五圓で特別税戸數割の八萬七千四百八十圓は一戸平均額七十錢（昨年十七圓三十錢）の增額により昨年の八萬三千九百五圓に對し三千五百七十五圓の增加で其他營業收益税、地租縣税家屋税等附加税の增減により昨年の十四萬四千三百三十三圓に比し三千七百三十三圓の增額を示してゐる

高級助役何處？

新豫算には消えて跡無き線香はなび

先年水道部專任の助役が無くなつて以來永い間中絶されてゐた平町の助役二人制は町勢の伸展に伴ふ内外事務の輻湊から九年度に於て金八百圓也が計上されて以來娘一人に八人のヤヤコシイ空氣を捲き起した爲結局一年間は無爲に流れてしまつた、外のことなら場合によつては繰越計上も出來やうが何せ人件費なのでそうも行かず、あれ程騷ぎ立てられたさしもの助役問題もこうなつては丁度夏の夜の線香花火のやうに儚なく消ねてしまつたわけだ

第三第四兩校敷地買收費依然同額を計上か
差當り追加豫算に讓る

第三及第四兩小學校の敷地買收費は九年度に於て八千七百六十圓を計上し乍ら其儘に過ぎたが更に來年度に於ても繼續すべく他方面歲出の關係から當初豫算には一圓の基本額を計上したが後日の追加豫算にはやはり同額位を計上すると

凶作防止耕種改善講演座談會
郡內の開催日取決定

凶作防止の方法として從來の耕種に改善を加へるとともに水稻品種の改良を期すべく縣では凶作防止耕種改善講演座談會を開催する事となり二十日日割を次の如く決定した、各會場とも午前九時開會、午後三時散會するが出席者は制限なく成るべく多く出席せしむるやう開催地町村長に依賴した

△三月十九日―澤渡△二十日―川前

第三校月次運動會

平第三小學校明二十二日の二月月次運動會は三年以下は

一年―鎌田山 二年―夏井川新土堤 三年―谷川瀨潮山

と夫々午前十時發正午歸校 四年以上は午前九時半より午後零時半

四男―ボートボール、四女―方形ドッヂボール、五男―少年フットボール、五女―エンドボール、六男―バスケットボール、方形ドッヂボール

の球技會を行ふ

都計併合區域
來月十一日の委員會で正式に決定か（調査）

平及小名濱兩町の都市計畫併合區域は既報の如く縣當局富永技師等の手により測量中であつたが今回愈々成案が出來たので來月十一日縣廳會議室で地方委員會を開く事になつたので青沼平小野小名濱兩町長其他が出頭する筈であるが、兩町の都市計劃案による決定區域は

（平）飯野村北白土、谷川瀨、內鄕村御厩、御臺境、小島、好間村下好間愛谷、今新田、川中子、平窪村下平窪、中鹽、四ッ波、幕の內、鯨岡、大室、神谷村鹽鎌田を含む百二十七萬五百坪

（小名濱）泉村瀨尻、玉川村南富岡大原岡を含む百十一萬二千五百坪

である、尙平町十年度同計畫調査費は昨年の一千二百五十圓に比し四十圓增の一千二百九十圓である

料理業結束
聯合會創立準備

平署管內約百三十軒の料理業者（二業或は三業）は同業間の統制を圖る目的で聯合會を組織する事になり昨二十日午後一時から同署會議室に創立準備役員會を開き種々協議した

。。。。。內鄕敎員講習會

內鄕敎員會では明後二十三、四の兩日高坂校で修身及び訓育に就いて敎員講習會を開くが、講師は縣女子師範校訓導村越豊一氏であると

郡敎育部會優成者表彰

石城敎育部會では例年通り今期の修卒業期に際し區內小學校は卒業學年一學級一名、補習校は卒業生中一名、青訓は修了生中一名の優秀成績者を表彰するが、來月六日迄に內申、詮衡の上決定するもので今二十一日部會より夫々各學校に通牒された

紳士になり澄して三原山觀光（計劃）
神谷の拐帶小僧捕はる

神谷村大字上片寄信雄長男吉岡良吉（一七）假名―は十九日午後四時頃自宅にあつた四百六十圓の中百八十圓をかつ拂つて家出し、平驛から乘車三原山見物に行く途中土浦驛に下車、カバン、洋服、襟卷等を買つてすつかり旅裝を整へ昨二十日午前九時頃折鞄を小脇に意氣揚々同町仲城町地內を徘徊中その筋に怪しと睨まれ署に連引取調べの上前記の事情判明、父親信雄を呼び出して引渡した

陽春は微笑む
小川の水もぬるんで芹萠ゆる昨今の郊外

きのふも晴、けふもはれ、氣候は日一日と、『春』の濃度が增して來る―『冬』から解放される平地方のこのごろの天候を小名濱測候所に聽く

われ〳〵の方からいふと天氣は平年なみ、寒くなく暖かすぎるといふでもない、例の高氣壓が南の方へやつて來てゐる、此高氣壓南方移動が春來る―といふことになつてゐる、きのふでも、けふでも氣溫は極めて順調だから日一日われ〳〵の前に春が近づいてくるわけだといつてゐる。日かげでさへ凍み融けがして、下駄に食ひ込む土くれも五月蠅いが之が春の先驅と思へば腹も立たぬ。梅の蕾のふくらみから見ても、ほんたうの春が眼の前にやつて來てゐるのだとしみ〴〵思はれる

入學願書受理閑散

在平三中等校では既報の如く去る十八日より入學志願者の受付を開始したが受付開始より既に數日の今日に至るも願書提出の者一名もなく些か拍子抜けの形であると

。。。。火藥類取扱打合。。。

平署管內火藥類取扱關係者打合會準備會は來る二十三日午前十時から同署會議室に開く

鄕土の史的時事解説（二）
白水阿彌陀堂の第二回修理
本堂宇の特別保護建造物並に內壇安置五佛像國寶各指定に就て

勿來生

當時平の城より十町餘南也（下文は十七節に分揭連看）

かく云ひ、忠衡を以て岩城の始祖とし、成衡をして之が一代に擬してをる然るに岩城規基、吉田泰演二家藏の系圖は忠衡が弟になつてをり、鵜沼、龍門寺佐竹各藏本及び會津四家合考、續群從等の所收本は、自衡、繁衡、忠衡、成衡をみな則道の弟に書いてをる是れは何れが正しいか、現存史料では徴證するに至難ではあるけれど、大凡そは次節及び後節で假定する

又初期の岩城氏數代の居住たる大舘、大舘城と唱へし所は、何處であつたか、是れ亦不明であるが、近世以來專ら之に當てるのは、今の好間村大字下好間、湯殿山神社（寛永初年、出羽より分祀すると傳へ、俗に御塚權現と云ふ）の北崗を指すのであらう、此の地は舊昔の岩城郡好島莊內、後ちの岩崎郡大舘村で近世の獨立高三十石一斗六升四合外の高嶺に當る

次は岩城平藩主內藤忠興の儒員葛山爲篤が、寛文中（二三二一―三三、蓋し同九年前に係る）に撰して幕府に進納した『岩城風土記』の佛寺篇『白水六角堂』に之を少述する。該の文は後節に出すから此には省くが尙は其れには朝義以下常隆に至る十代の墳墓所在をも知らしめ、又隆忠と藥王寺の奇緣まで記してゐる。惟ふに其の白水堂と之が造立者に關しては、龍門寺十七世桃山作の『岩城之系譜』（次節に云ふ）其の他地方の舊記から參取したまでゝあらう

享保二年（二三七七）板本の『鎌倉實記』は、加藤謙齋（洛下隱士などとも號す）が著はした十七卷の大冊である。本書には特に賴義の女なる德尼の長壽を語り、加へて彼の尼が賴朝の旗擧げに通じてゐたことや、波立筌の出所、並に之が關係の地名、寺名まで奇蹟的に詳述してをる。先づ此れを載せれば

こゝにめづらしき便ござあれ（中略、但し此の分九節に既揭に付繼看せよ）其比、常陸ノ大掾淸行（岩城系圖の一本に、始め忠衡、後ち師隆とある）が嫡子小太郎成衡、ゆゑありて奥州に來にけるに、基衡（淸衡の子）が媒にて德姬を嫁しまおらせ、海道五郡菊田、行方、岩崎楢葉、推葉のあるじとなり（中略）成衡身まかせられて、德姬は德尼君とて國人あがめうやまふ

恩典に感激して孝養を勵むか
尊屬傷害に執行猶豫

既報―父母を火箸で毆りつけ重傷を負はせ平區裁判所で懲役六ケ月を言渡され控訴し福島支部で原審通り六ケ月を求刑された親不孝者平町立町ペンキ職鈴木始（三二）にかかる傷害事件の判決公判は二十日福島地方廷で開廷、中村裁判長より懲役六ケ月但三年間執行猶豫の判決あつたので流石不心得の當人も之の同情ある言渡しに性根を入れ替え孝養を勵むものと觀られてゐる

風呂敷包一つの簡易な人生移行
春に唆かさるる女給群

朝夕の冷氣は未だ〳〵冬の領域から出ては居ぬものの玆數日來の陽氣はほのかな春の感觸が感ぜられる。かかる時行はるる彼女等―女給群の風呂敷包一つの簡易な人生移行

二、三日前平町Tカフエーから飛び出したA子に纏はるコント一つ

×

最近頻りに陽氣に唆かされて何處かへ鞍替へを目論んで居たA子を何所から何う嗅ぎつけたものか素早く誘ひの手を出したのが〇〇町『×××』の女給K子―東京は戸塚、早稲田ボーイ相手の喫茶店の何か（？）なれど目下前記に手傳ひ中と聞く―之が矢張り春を感じてか、東京戀しの一念に歸京を思ひ立ち先のA子を後釜に据え樣としたものらしい

×

喜こんだのはA子『待つてました』とばかりその話をトン〳〵と纏めK子と共に〇〇町さしに行つてしまつた。一方TカフエーのA子の朋輩連、時節柄惡周旋屋の手にかゝつて何處かへ賣り飛ばされるんぢやないかと盛んに氣を揉んだが、〇〇相手のK子は將に一騎當千の玉拔き手、まんまとかつさらつてしまつた

×

朋輩の三女給いくら氣を揉まうと皆目何方へ行つたものやら判らず、思案の揚げ句明日某所へおがんで貰ひに行くことになつたが、おがみ賃三十錢の持ち合せが無く辛つと三人で出し合て出かけたもんだ

×

カフエーの裏面を語るべくは餘りに傷ましい話ではある

閑話休題その後A子の在りかを知る何かの手掛りが無いものかと朋輩の一人が當人の行李を探したら、自分の戀人からA子に宛てた連綿たる手紙が發見されたそうな

。。。。派出所落成式延期。。。。

小名濱町警部補派出所落成式は二十三日の處都合により無期延期

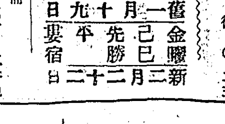
。。。。。秘藏の尺八判る。。。。

平簡易保險健康相談所囑託醫國井正さんは去る十六日午前中町內で中繼つきの尺八根本半分を紛失したので懸賞付きで八方たづね廻つてゐた折好間村小館五三號三渡邊年男さんが同日午後四時半頃町役場前で拾得好間駐在所に屆け出たので今二十一日下渡された

二十二日（小名濱測候所調査）

日出 六、一八 日沒 五、二五 月出後 九、〇二 月沒前 七、三七

滿潮前 六、〇〇 後 六、一五 干潮前 〇〇、二〇 後 〇〇、二五



新 二月二十二日 金曜 己巳 先勝 平 要宿 舊 一月十九日

諸判定應需 東京市本鄕區湯島四丁目五番地 高島易斷總本部 神 館

▲一白の人 大福の日何事にも機を逸せず進むがよろし▲二黑の人 波風なき樣に見えても油斷のならぬ日なり▲三碧の人 心のみ焦慮して無駄に時の立ち行き易き日▲四綠の人 目上の同情ある日謙遜なれば更に實入あり▲五黃の人 氣に緩みを生ずる時は意外の失敗ある日▲六白の人 進出するは凶なれども心の淋れぬ樣にせよ▲七赤の人 吉日なれども油斷すれば秩序次第に亂れん▲八白の人 意見の通らぬ日屈するは伸びるの基と知れ▲九紫の人 運氣堅實となり事業は益々發展し行くべし

生徒募集
願書四月八日迄（可成至急）
修業年限 產婆 看護婦 を通じて一ケ年
平町才槌小路（元一丁目）
石城產科看護婦學校
電話三五七番

夜間診療
胃腸 性病 專門
內科 胃腸病科 花柳病科 性病科 皮膚科
胃腸性病 松村科醫院
（平町南町電話一〇七番）

銘木ト建築木材ノ御用命ハ今一番勉強スル當店へ
內外銘木 建築材一式 便利一瓦
㊄織田材木商店 平町紺屋町 電話四六〇番
榧優良材碁將棋盤アリ格安讓リタシ。

外科
內臟外科 レントゲン線
醫學博士 諸橋鐵彌
新川町二七（電四六四）
△病室完備▷

吸入用酸素 純度99%
度量衡 モノサシ マス ハカリ
計量器 体温器 寒暖計
關內藥局 電話四〇番

お醬油は……ヤマフル
味噌醬油 たひら正宗 鰹節 食料品
鹽屋 山崎合名會社 福島縣平町
電話（營業部一〇番 本店二七番）
明治生命磐城代理店 山崎與三郎